過負荷（アレン・ウォーカー）と神の使徒

天空　翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過負荷（アレン・ウォーカー）と神の使徒

【Ｎコード】
Ｎ３６５４Ｚ

【作者名】
天空　翼

【あらすじ】
とある過負荷（マイナス）の少年が手違いの事故で意識不明になってしまい元の世界に戻るまでＤグレのアレン・ウォーカーに憑依する話。

「え？悪魔との戦争？それって僕がいる限り勝てないんじゃない？あれ？あの神田って男の子、面白そうだね。いいよ、転生してあげようじゃないか。」

プロローグ

ん？僕死んだ？

え？違う？

元の世界に戻るまで転生？別にいいよ、僕は過負荷（マイナス）だからそこらへんで待ってるけど？

え？その世界のある人間が危険な状態？そんなの知ったこっちゃないね。

ん？この子、なんだか面白そうだね。じゃあいいよ。転生しようか。

特典？いらないよ。この能力（マイナス）があれば僕は十分。

てかそれしかないしね。

悪魔かぁ、僕がいる限り勝てないだろうけどいいか…

暇つぶしにはもってこいだしね。

この神田って子、特に僕を楽しませてくれそうだ。

さぁ、行こうか。僕（マイナス）が介入したこの物語に待つのは敗北（しょうり）か勝利（はいぼく）か、

果たしてどっち…？

第一夜　「じゃあ、おやすみ。神田君（ぼくのおきにいり）」

『やれやれ、何でこんなところにあんな建物を建てたんだろうねぇ…アレンちゃん。』

「そんなの知らないよ。」

白髪の少年、アレン・ウォーカーが一人で何者（マイナス）かと会話していた。

「というか、何で君が登らないのさ！」

『過負荷（マイナス）の僕にそんなことさせるつもり？何が起こるかわからないじゃないか。』

「調子いいんだから…」

アレンはそう呟くと再び崖を登り始めた。

黒の教団

「ふぅ、やっと着いたぁ…」

『お疲れ様、もう変わっていいよ。』

「本当の主人格は僕なのに…なんで出てるだけで疲れるんだろう…」

アレンは過負荷(アレン)に交代する。

「それが僕(マイナス)を宿す代償なんじゃない？いいじゃないか、僕がいなくなる日は刻一刻と近づいてるんだから。」

『それはそれでなんか寂しいよ。』

過負荷(アレン)の後ろに半透明のアレンが浮いている。

そう、彼は二重人格なのだ。それも一つの体に過負荷(マイナス)と普通(プラス)が宿っている異常(アブノーマル)な。

「まぁ、何と言うか…」

『話には聞いてたけど凄いなぁ。エクソシスト総本部、黒の教団…』

「そうだね～」

『なんか楽しそうじゃない？』

「別に～あ、やっぱ楽しいかも。楽しくて楽しくて

――――――――とてもつまんないや。」

『っ！』

ゾクリッ

アレンの意識体を悪寒が襲う。

「あ、ゴメンね。怖がらせちゃった？」

『ちょ、ちょっとだけ…』

「はやくこの性格（マイナス）も制御できるようにしなきゃね～」

儚い笑みを浮かべながら過負荷（アレン）は自分の手の平を見つめる。

『でもアクマにも有効な過負荷(マイナス)は教団も頼りにするんじゃないかな？僕も何回それで助けられたか…』

「でもこの力(マイナス)があるせいで君は不幸なんだよ？長い間自分の体を僕(マイナス)に貸してなきゃダメだし。」

『でも今は桜麻だって立派な僕の家族だよ。』

「ありがとうねアレン。」

桜麻と呼ばれた過負荷(アレン)はにっこりと今までの儚い笑顔とはまったく別の笑顔をアレンに向ける。

『……本当は離れたくないんだ（ボソッ』

「なに？」

『な、何でもないよ！（そんなこと言ったらきっと桜麻は困る…）』

「じゃあ、いくよ。すみませーん！クロス・マリアン元帥の紹介で来たアレン・ウォーカーでーす！紹介状が来てると思うんで疑うのならそちらを参照にー！コムイのやつならきっと埋もれてるだろうとか言ってましたんで念入りにー！あと、神田って男の子と戦わせてくださーい！」

ニコニコ笑いながら言う過負荷(アレン)にモニター越しの全員が悪寒を感じたのは彼が過負荷(マイナス)だからであろう。

その後、なんやかんやで過負荷(アレン)は教団へと無事入団したのである。

「やぁ、神田。」

ニコニコと過負荷(アレン)は自室に戻ろうとした神田に声をかける。

「なんだモヤシ。」

「モヤシかぁ、過負荷(ぼく)にはピッタリだけどアレンには相応しくないあだ名だね〜」

「…何なんだ…っ！？」

神田の体がくすむ。

「？」

儚い笑みを浮かべた過負荷(アレン)は首を傾げる。

「お、お前は……何なんだ……？」

声が震える。

神田を襲った恐怖という感情の原因は間違いなく過負荷(アレン)だった。

「僕ですか？神田は変なことを聞くなぁ。僕はアレン・ウォーカー…君の言うモヤシだよ？」

「違っ「そして過負荷(マイナス)だ。」ま、過負荷(マイナス)…？」

「そっ。何言ってるかわからないって顔してるね。まぁ僕は君達とは違って最高を最低と思って生きる人間だからね。知りたかったら僕を調べればいい。僕は君を気に入ってるからね…じゃあ、おやすみ。神田君(ぼくのおきにいり)。」

そう言うと過負荷(アレン)は自室へと入っていった。
重苦しい空気から開放された神田はその場に情けなくずるずるとへたり込んだ。

呼吸が苦しい、あの息苦しさが今も残ってる…

しかし、知りたい…。あいつのことが…何故俺をお気に入りと呼んだのか…

神田は思う。
それこそが自分自身を過負荷(マイナス)の領域へ踏み込ませてしまう第一歩だったとも気づかずに…

「あぁ、待ちきれない…はやく僕と同類(マイナス)になってくれよ、神田(おきにいり)…」

第一夜　「じゃあ、おやすみ。神田君（ぼくのおきにいり）」（後書き）

次回――――マテールの亡霊？亡霊なんてまさに過負荷（マイナス）の僕にピッタリだね。

第二夜　「マテールの亡霊？亡霊なんてまさに過負荷（マイナス）の僕にピッタ

朝ごはんを食べに来た過負荷（アレン）はアレンに代わる。

「は、初めまして！アレン・ウォーカーです！」

「礼儀正しい子ね～アタシ、何でも作っちゃうわよ？」

「何でもですか…」

『来るな～アレンのアレが…』

「じゃあ、グラタンとポテトとドライカレー、マボー豆腐とビーフシチューと……後デザートにマンゴープリンとみたらし団子２０本！」

「彼方、そんなに食べるの…？」

後ろで過負荷（アレン）が苦笑いをしている。

「なんだと！？もういっぺん言ってみやがれ！」

「おい、やめろ！」

『何かあったようだね…』

「うん。」

アレンは見に行く。

「うるせぇな、食うときに後ろでメソメソ死んだやつの話なんかされちゃ飯がまずくなる。」

『あ、アレン。僕に代わってくれないかな？』

「え？う、うん。」

『ありがとう、食べるときは変わるからね。』

アレンは過負荷（アレン）に交代する。

「神田君、いい加減に……」

「何だ新入り、俺に何か言いたいのか？」

「素直になったらどうですか？」

「「「は？」」」

全員が固まった。

「だって神田君って後ろで死んだ人のこと言ってほしくないんでしょ？これってつまりあれでしょ？神田君も本当は悲しくて泣いちゃいそうでそれを自分は我慢してるのに他の人が泣いてるのが気に入らない…つまり泣かずに敵（かたき）である千年伯爵を倒そうって言いたいんでしょ？」

「お、おいてめっ「そして死んだ仲間の無念を晴らそう！そう言いたいんでしょ？本当は神田君も昨日ベッドでメソメソ泣いてたんじ

ゃない？悲しくって辛くって、だって目が赤いよ？だから仲間に泣かずに千年伯爵と戦おう！そして仲間の無念を晴らそう！直訳するとこういうことを言いたいんでしょ？」勝手に「そういうことだったのか！」は？」

「すまねぇ、お前の本心を知らずに…」

「そうだな！いつまでも悲しんでないで千年伯爵を倒して敵をとるぞ！」

「あぁ！」

「「「おぉー！！」」」

「ほら！神田君も！」

「お、おぉー……」

神田も回りに流され拳を突き上げた。

『す、凄い…さすが師匠の舌をも巻かせたマシンガントーク…』

「あぁ、神田！アレン！任務だぞー！」

「はーい！てなわけでアレン、僕が任務聞いてからご飯でいい？」

『うん！』

（こいつ…まるでもう一人の自分と喋ってるみてぇだ…）

そして

「よもや神田ちゃんと同じ任務に就くとはね〜、僕ら何か縁があるのかな？」

「うるせぇ。ちゃんづけすんな。」

儚い笑顔を浮かべながら言う過負荷（アレン）に神田はそう返す。

「ゴメンね。僕の癖なんだ。こういうの。」

「直せ。」

「手厳しいな〜。ね、アレンちゃん…」

『アハハハハ…（汗』

過負荷（アレン）はボソリとアレンに呟く。

それにアレンは苦笑いするだけだった。

実はこの組み合わせ、神田の要望だった（秘密裏）。

彼は過負荷（アレン）の言った過負荷（マイナス）のことを知りたいがゆえの選択だった。

マテール

「ここがマテールかぁ。過負荷(マイナス)の僕にはピッタリの町だね♪」

『そんなこと言わないでよ悲しいから。』

「そうかな？僕はなんともないけど、というかいつものことだし。」

『僕からしたら悲しいんだ！』

「そっか、アレンちゃんは普通(ノーマル)だもんね。じゃあ気をつけるよ、アレンちゃんを泣かしちゃせっかく体を貸してもらってるのに悪いし♪」

「何ぶつぶつ言ってんだ。」

神田の言葉に顔を上げいつもの儚い笑みを浮かべる過負荷(アレン)。

「アハハハ、なんでもないよ♪」

「そうか、しかし…探索部隊(ファインダー)が全滅か…」

「うん。それだけ強いアクマだいるんだよね。」

ジャンプとか少年漫画の主人公ならここで怒るんだろうけど残念ながら僕(マイナス)にそんな情はないんだよね～♪と考えまた儚い笑顔を浮かべる過負荷(アレン)。

『気をつけて桜麻、ここ嫌な感じがする…悲しくて泣いてるような…』

「うぅーん、たしかにマイナスな感じはするねぇ。神田君、気をつ

けてねー。」

「お前も来んだよ！」

「あ、そう？まぁ、ここにいるアクマに僕の絶望歌（デスパレットソングス）が効くかが問題なんだけどね～」

「絶望歌（デスパレットソングス）？お前のイノセンスの名前なのか？」

「違うよ神田君。これは僕のイノセンスの名前じゃない。僕の過負荷（マイナス）だよ。」

神田は眉を寄せる。

「昨日から聞きたかったんだが、過負荷（マイナス）とは何だ…？」

「あ、うん。過負荷（マイナス）ってのはね…あ、神田君。あっちで爆発が起きたよ。」

「なに！？くっそ、話は帰ったらじっくり聞かせてもらうからな！」

「はいはーい♪」

仮面の笑みを浮かべ過負荷（アレン）は神田と走った。

第二夜　「マテールの亡霊？亡霊なんてまさに過負荷（マイナス）の僕にピッタ

次回――――へぇ、面白い能力だね。でも僕の絶望歌（デスパレットソングス）には効かないよ♪

第三夜　「へぇ、面白い能力だね。でも僕の絶望歌（デスパレットソングス）に

「僕があのアクマ相手するから神田ちゃんは亡霊ちゃんの方をお願いね～」

「わかった。あと神田ちゃんは止めろ！」

「はいはい。」

レベル2か…と呟く過負荷（アレン）。

「うん。楽勝だね♪」

『君の能力って時々反則だよねー』

「そうかなぁ？」

アレンと過負荷（アレン）が話しながらアクマに向かう。

「お前を殺してからだぁぁぁぁ！！！」

イノセンスを追いかけるか過負荷（アレン）を倒すかで悩むアクマは過負荷（アレン）を殺してからイノセンスを回収することに決めた。

アクマが過負荷（アレン）にその腕を突き刺す！

「心臓を貫いてやったよヒャヒャヒャヒャヒャ！」

「あのバカ…！なに油断してんだよ…！」

アクマも神田も過負荷(アレン)が死んだと思った。
しかし…

「あーあ、団服が血で汚れちゃったじゃないか～」
過負荷(アレン)はそこにいつもの儚い笑みを浮かべ立っていた。

「「な！？」」

「な、何故生きてる！？確かに心臓を…「怪我も直さなきゃな～リン ツァ ディ ト ラ リ シュア クェ ディスト リン ツァ ディ ト ラ リ シュア クェ ディスト」
黒い光が怪我のところに集まり徐々に怪我を吸い取っていく。

「そうか、それがお前のイノセンスか！」

「は？違うよ君、僕のはイノセンスじゃない。過負荷(マイナス)だよ。」
過負荷(アレン)はそう言うとイノセンスを発動しアクマを切り裂く。

「あれ？これ皮かな？じゃあ」

「本物はこっち…」

その声とともに後ろから何かが過負荷(アレン)を貫く。

「それが君の能力ですか～面白いですね～」

過負荷(アレン)は笑いながら自分に化けたアクマを見やる。

「でもそれが命取りだよ～だって僕に触れちゃ簡単に死ぬもん。」

自分を貫くアクマの腕を掴む。

「ディ　リ　ツァ　クェ　トル　イン　ディスワノ　テ　ト　タ
ディ　リ　ツァ　クェ　トル　イン　ディスワノ　テ　ト　タ」

過負荷(アレン)が歌をその口から奏で始めるとたちまちアクマは砂になり消滅した。

「アレンちゃん、魂は？」

『無事だよ！アクマからも開放された！』

「いやぁ、よかった。制御出来たね今回も！それじゃあ」

「『アーメン』」

アレンと過負荷(アレン)は胸で十字を切った。
そして呆然としている神田の横に降り立つ。

「やぁやぁ神田ちゃん！この人が亡霊と人間の子かい？」

「あぁ。」

「ふぅん、彼方、もう長くないね。」

「あぁ、だからララと最後はともにいたい…」

「……もう一度歩ませてあげようか？新たな人生を。」

「なに？」

「君を若返らせるんだよ。姿を変えてね。そしてララちゃんも人間に変える。足が動かなかったりするけどそれは僕が過負荷（マイナス）だからだよ。あ、イノセンスを回収してからじゃないと無理だけどね。」

「おいお前、そんなことが…」

神田は驚いた顔をする。

「できるよ。僕ならね…」

にっこりと儚い笑みを浮かべた過負荷（アレン）に神田はなにも言えなくなった。

「その言葉、信じていいのか？」

「うん、騙されたと思ってさ。ね？」

「…信じてみよう。」

「じゃあララちゃん、イノセンスを回収させて。そしたら人間の体に作り変える。その後、グゾルさんも若返らせる。」

そして歌が紡ぎ出された…

「ラ　ト　ラ　ト　タ　ト　ラシソ　タ　トテ　ティ　ト　ト　ラ
ト　ラ　ト　タ　ト　ラシソ　タ　トテ　ティ　ト　ト」

その唇からは軽快な歌が奏でられる。

「リン　ツァ　ディ　ト　ラ　リ　シュア　クェ　ディスト　リン
ツァ　ディ　ト　ラ　リ　シュア　クェ　ディスト」

そして再び改装の章が歌われ、そこには普通の少年と普通の少女がいた。

「私…人間になれた？」

「うん、バッチリ♪」

「凄い、若返ってる、顔も醜くない！」

「ありがとう、これでグゾルと一緒に過ごせる、人間として！」

喜ぶララとグゾルを目に神田はひたすら今のあり得ない状況に考えをめぐらせていた。

（何だ今のは！？こいつは神みたいなことをやってのけた！？しかも簡単に！？まさか本当に神…？いやでもそんな馬鹿なことが…）

「混乱しちゃってるね～。さ、帰ろうか神田君♪グゾルさんとララちゃんも一緒にね、２人が過ごせる場所を探してあげる♪」

「ありがとう、貴方はまるで神様ね…。」

「僕は神様じゃないよ。過負荷（マイナスがめざめたアレン・ウォーカー）だよ♪」

過負荷(アレン)はにっこりと儚い笑みを浮かべるとマテールの町から出て行った。

神田はその夜、夢を見た。
闇の中、たたずむ自分に話しかける声の夢を…

――あぁ、早く…早く目覚めたい……

誰だ？

――俺を早く目覚めさせて一体になってくれよ……

誰だと聞いている！

――君をよく知るモノだ、わからないか？

俺をよく知るモノだと？

――そうだ。そして君自身がよく知っている。

誰だ？いったい、誰だよ…

――君は俺と同じモノに出会っているはずだぜ？

もう俺がお前と同じモノに出会っているだと？

――あぁ、そうだ。そして彼は『敗者(しょうしゃ)』であり『勝者(はいしゃ)』でもある。

敗者(しょうしゃ)であり勝者(はいしゃ)だと？何故勝っているのに敗者なんだ？

――彼とその同類……過負荷(マイナス)にとって勝ちは負け、負けは勝ちなんだ。

過負荷(マイナス)…モヤシのことか！？

――そう。過負荷(アレン・ウォーカー)…彼は……過負荷(マイナス)は何をやっても負け続ける存在だ。

可哀想だな過負荷(マイナス)は。

――そうでもないけど？だって彼らにとって負けは勝ちなんだよ？つまり普通(ノーマル)が感じる負け続けるということは彼らにとって勝ち続けることになる。

で、お前は何者だ？何故俺に語りかける？

――俺はいつも君のそばにいるぜ？そして、君のことをよく知っ

ている。気づくかどうかは自分次第…

何だ？闇がはれていく？

っ！お前は…！

パチッ

「っ！夢、か…？」

目覚めた神田はベッドから起き上がり自身にしか見えない蓮の花を見やる。

「！？」

蓮の花…神田の命が何度も無くなった度に増えるそれが1枚もなくなっていた。

代わりにあったのは、鳥兜…花言葉は騎士道。

「どういう、ことだ……！？それに、夢で出会ったのは……

俺……？」

彼は知らない。自分の内面が徐々に過負荷(マイナス)によって侵されていってることを……

彼の頭に響く声と浮かぶ顔…

儚い笑顔を見せ過負荷(ユウ)は言った。

――――早くこっちに来いよ、過負荷(マイナス)の世界へ……――――

第三夜　「へぇ、面白い能力だね。でも僕の絶望歌（デスパレットソングス）に

次回――――過負荷（マイナス）について知りたい？じゃあ教えてあげるよ

第四夜　「過負荷（マイナス）について知りたい？じゃあ教えてあげるよ」

過負荷（アレン）は夢を見ていた。
そしてその中で1人の少年と出会っていた。

「やぁ、球磨川君。」

「『やぁ』『観弥城君』」

お互いはにっこりと純粋な笑みを浮かべる。

「「『久しぶりだね♪』」」

負完全（マイナス）、大嘘憑き（オールフィクション）、球磨川禊がやって来ようとしていた…

「おいモヤシ。」

「神田！？」

アレンは神田に駆け寄る。

「（こいつ、違う！？）てめぇは誰だ。」

「え？アレンですよ！アレン・ウォーカーです！」

「いいや違うな。お前はあいつと違う。あいつがいつも出している気持ち悪さがない。」

神田はギンッとアレンを睨む。

「えぇっと、桜麻のこと？」

「あ？」

「あぁやっぱり。初めましてかな？僕は神田のことずっと見てたんだけど…アレン・ウォーカーです。いつも桜麻がお世話になってます。」

「は？」

神田は訳がわからなかった。

そしてマテールでの出来事を思い起こす。

『そっか、アレンちゃんは普通（ノーマル）だもんね。じゃあ気をつけるよ、アレンちゃんを泣かしちゃせっかく体を貸してもらってるのに悪いし♪』

「お前が、もう一人のモヤシ…？」

「モヤシってなんですか！僕にはアレン、彼には桜麻って名前があるんです！それに主人格は僕です！」

「どういうことだ？」

「えと、聞かれるとマズいんでちょっと場所を移してください。」

そして2人は過負荷（アレン）／アレンの部屋に入る。

「で？お前達と過負荷（マイナス）について教えろ。」

「えぇっと、まず僕らのことですね。あ、これ。」

アレンは紅茶を出す。

「まず僕の過去についてお話しなければならないです。僕はマナと

言う人とともに旅をしていました。しかしマナはある町で死んでしまった…。僕はマナのお墓の前で泣いていました。そんなとき、千年伯爵が現れました。」

神田は黙って紅茶を飲みながら話を聞いていた。

「僕は伯爵の甘い誘いに乗ってマナをアクマにしてしまった…。しかし、桜麻が僕の目の前に現れた…」

『あーあ、やっちゃったねぇ…』

振り向く幼い目に傷のついた痛々しい姿のアレン。

「き、キミは！？ぼ、ぼく…？」

過負荷（アレン）はにっこり笑った。

『僕は君の体を借り宿にしてるんだ、やっと話せたね。君が過負荷（マイナス）になってくれたから…。あ、あいつはマナじゃないよ。アクマさ…。』

「アクマ？」

『あぁ、壊さなきゃ…壊してあげなきゃ彼は消滅し天国にも行けない、この世界から存在が消えるよ？』

「そ、そんな…うわっ！」

そのときアレンの腕が巨大化しアクマとなったマナに向かう。

「や、ヤダ！逃げてマナァ！！」

『壊さなきゃ彼は望まぬことを強いられ続け道具のようになるんだよ？そしていつしか消えてなくなる。彼、本当に死んじゃうんだよ？』

「そんなの…そんなのヤダ！！」

『なら、壊そう。』

「あ、あぁぁ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そのままアレンはイノセンスの腕でマナを…アクマを切り裂いた……

「そして僕はマナを殺したという事実を受け止められなくてマナのお墓の前でずっと大泣きし続けました。でも、そんな僕に桜麻は言った…。」

【あぁ、可哀想な子だね君は…。自分の愛した人をアクマにしそして愛した人がなったアクマに傷を作られ、そして今度は彼を殺した。君がね…】

「僕はそれを聞いてさらに泣き叫びました。でも彼はこう言った。」

【でも、その理不尽な出来事を受け入れるんだ。そうすれば伯爵を倒せる】

「って！」

【受け入れるんだよ、世の中の不条理を理不尽を嘘泣きを言い訳をいかがわしさをインチキを堕落を混雑を偽善を偽悪を不幸せを不都合を冤罪を流れ弾を見苦しさをみっともなさを風評を密告を嫉妬を格差を裏切りを虐待を巻き添えを二次被害を…！全て、全てね！】

「そうすれば同類（マイナス）になってイノセンス以上の力…過負荷（マイナス）を持てる！そして、伯爵を倒せるって！それは決して気持ちのいい勝利じゃない、過負荷（マイナス）にとっての敗北（しょうり）だ。でも僕はそれでもいい！けど…いまだに全てを受け入れられない…だから、受け入れるまで待っててもらってるんです。」

神田は思った。
アレンも過負荷（アレン）の影響を受けた被害者なのだと…

「やぁ、神田君（おきにいり）！」

神田は悪寒と嫌悪感を感じバッとアレンのほうを振り向く。
そこにはアレンはおらず、過負荷（アレン）がいた…

「アレンちゃんから聞いたよ！僕に過負荷（マイナス）の事を聞きたいってわざ

わざ尋ねて来たって！いや～お気に入りが来てくれると嬉しいよ～♪」

「お前…！もう一人のモヤシは！？」

「あぁ、寝てるよ。精神世界でグッスリと…僕を宿す代償なんだか、長い間表に出ると彼は疲れちゃうんだよ～」

「そ、そうか…」

過負荷(アレン)はでもいきなり出てきたこと知ったら怒るよな～きっとまだ神田君と話したかっただろうしとぶつぶつ呟く。

「おい、単刀直入に聞く。過負荷(マイナス)とは何だ？」

神田が聞くと彼はやれやれという顔をする。

「まだわからないのかい？同類候補(マイナス)の神田君。」

「俺が、同類(マイナス)…？」

「あぁ、君は僕等(マイナス)と同じ素質を持っている、過負荷(マイナス)になってさらに堕落(せいちょう)すれば球磨川君をも超える過負荷(マイナス)になるかもしれない！！君が探してる人も見つかるかもね…」

儚い笑みを浮かべた過負荷(アレン)はそう言う。

「あぁ、ここでアレンちゃんの過負荷(マイナス)を使うことになるとはね…。彼はまだ過負荷(マイナス)になってないけど、彼の中で少しずつ堕落(せいちょう)し始めてる能力を僕が使うことはできるんだ。」

神田は危険を感じ後退するが後ろは壁。
過負荷(アレン)は両手で神田の顔を自分の真正面に固定すると、額をくっつけ囁いた。

「受け入れるんだ、世界の負の全てを…不条理を理不尽を嘘泣きを言い訳をいかがわしさをインチキを堕落を混雑を偽善を偽悪を不幸せを不都合を冤罪を流れ弾を見苦しさをみっともなさを風評を密告を嫉妬を格差を裏切りを虐待を巻き添えを二次被害を…全てを受け入れれば君は僕等と同じ過負荷(マイナス)になれる。そして千年伯爵なんか目じゃない力を手に入れられるだろう。そしてそして…君の探してる人も探し出せるさ…」

「や、止めろ…」

「受け入れるんだ。」

「やめっ…！」

「受け入れるんだよ。自分の過負荷(マイナス)性を、不幸を。そうすれば同類(マイナス)になれる。」

「過負荷(マイナス)に、俺、が……？」

「あぁそうさ。」

「そうすれば、あの人を見つけられるのか…？」

「きっとね。僕も手伝ってあげるよ…。そして君のすべてを受け入れてあげる…」

神田の瞳から光が失われる。
そしてその瞬間、神田の心にある感情が流れ込んできた…。

世の中の負の全て、世の中の理不尽さがどれだけ馬鹿馬鹿しいか、
自己嫌悪、劣等感と虚しさ

「これが、過負荷(マイナス)か…」

「どうだい神田君？」

過負荷(アレン)はいつもの儚い笑みを浮かべている。

「すごく馬鹿馬鹿しいぜ、全てが…馬鹿馬鹿しくて、理不尽すぎる。
そういえば…お前の目を見たらこうなったぞ？何故だ？」

「アレンちゃんの中で堕落(せいちょう)している過負荷(マイナス)なんだ。アレンちゃんが
過負荷(マイナス)になれないからアレンちゃん自身は使えないんだけどね♪名
前は狂った人形(ドールザデスト)。触れた人の心を狂気、狂喜とかのマイナスの感情
で埋め尽くして強制的に同類(マイナス)にしたり異常(アブノーマル)にしたりする能力だよ♪
過負荷(マイナス)性のある人は苦しまずに過負荷(マイナス)になれるんだ～」

「なるほどな、それで俺の過負荷(マイナス)を目覚めさせたのか…。」

新たな過負荷（マイナス）…狂凶武道神田（クレイルックサムライ）ユウ、堕落（たんじょう）。

月夜をバックにたたずむ5人のうち1人の少女が男性の言葉を聞き叫び声をあげた。

「えぇー！私の神田様が過負荷（マイナス）になっちゃったのー！？」

「はい、残念ですが。」

「そんなー！」

「残念です～。彼は私達の仲間にできると思ったのですがぁ～」

1人のおっとりした女性がそう言う。

「しかし、アレン・ウォーカー…彼が過負荷（マイナス）とは思いもよりませんでしたね。」

少年が礼儀正しく男性に話しかける。

「えぇ、しかもめだかボックスの世界の人間までこちらに来ています。」

「ただのDグレの世界というわけではないようですね～。ねぇ？」

忍者のような姿の青年を見やる女性。

「コクリ」

青年は黙って頷く。

「いや待てよ？過負荷（マイナス）神田様×原作アレンきゅん…いい！薄い本のアイデア来た！まず私が行っていいー？」

「いいですよ、セイント。」

セイントと呼ばれた少女は大喜びすると不敵な笑みを浮かべた。

「アハッ♪神田様、アレンきゅん、今行っくよー！」

異端者（イレギュラー）、正義の会がやって来る…

第四夜　「過負荷（マイナス）について知りたい？じゃあ教えてあげるよ」（終）

次回――――やぁ、久しぶりだね球磨川君

第五夜　「やぁ、久しぶりだね球磨川君」

教団内で最近、ある問題（？）が起こっていた。

「やっほー！神田ちゃん一緒にご飯食べよー」

「いいぜ。」

「やったー」

このように過負荷（アレン）と神田がよく行動していることだ。

それも仲良さそうに。

この光景には教団の誰もが目を見開いた。

人をなかなか寄せ付けない神田、恐ろしい分陰気を出しているが慣れれば案外、人懐っこい普通の子供な過負荷（アレン）。

ある意味相性最悪そうなその２人が並んで歩いてよく部屋に泊まってご飯を食べているとなるとかなり異様である。

しかし誰も知らない。神田が過負荷（マイナス）になったこと、過負荷（マイナス）の壮大な計画『第三者計画』を…

「しかし、本当にこれでいいのか？」

「ん？何が？」

神田はアレン・ウォーカーの部屋で過負荷（アレン）に聞く。

「教団から抜けての計画実行についてだ。俺達みたいなエクソシス

トを教団は簡単に手放さないと思うがな。」

「神田ちゃんは律儀だな〜♪僕らは最低(マイナス)だよ？常に最低な気分、底辺ところに、敗北を味わい続けなくちゃならない。勝利したとしてもそれは虚しい勝利だ。そんな僕らがエクソシストなんてエリートなところにいちゃいけないよ。それに教団を抜けたほうが君の目的も果たせそうだしね。」

「それでこの第三者計画か…」

「そう！僕らは完全に第三者となる！教団とも、アクマ側にもならない、完全な別の第三者になるんだ。」

神田は不適に笑う。
それを見て過負荷(アレン)も儚く笑った。

「あ、ときに神田ちゃん。僕はこれからある人に会いに行こうと思っているのだがどうだろうか？」

「ある人？」

「僕が異世界人だってことは知ってるよね？その異世界にいたときの一緒に堕落(せいちょう)してく仲間が来るんだよ。もうすぐね…。そしてその子は僕らの中で最弱(さいきょう)の過負荷(マイナス)を持っている。」

「で、誰だよそいつは？」

「ふふっ、君も一度は名前を聞いてるはずだよ？

球磨川禊君だよ♪」

「球磨川、禊？」

「そう。通称、不完全。彼の過負荷（マイナス）は大嘘憑き（オールフィクション）…全てを『なかったこと』にする力を持った過負荷（マイナス）さ。世界すらなかったことにする能力でもある。」

「世界すらだと！？そんな過負荷（のうりょく）を超えるって…お前はどんな期待を俺に抱いてんだよ！」

「アハハハハッ♪」

「笑ってんじゃねぇぞ…！」

「君の過負荷（マイナス）の堕落性（かのうせい）だよ～」

「何が堕落性（かのうせい）だ…」

神田は過負荷（アレン）を見やる。その瞬間、神田の背後に重いものが圧し掛かった。

「かーんーだーちゃん♪」

「重ぇ！」

過負荷（アレン）が圧し掛かったのだ。

「てか、いつのまに！」

「僕の過負荷（マイナス）は４つあるんだよ～？１つはアレンちゃんのだけどね～」

過負荷（アレン）はけらけら笑いながら団服を着込む。

「さぁ、行こっか♪神田ちゃん♪」

「神田ちゃんは止めろ！！」

神田はそう怒鳴りながら差し出された手を握った。

「じゃあ行っくよ～、悪転移動(ダポート)！」

その瞬間、彼らはまったく別の場所に移動していた。

「これも過負荷(マイナス)か？」

「うん！僕のもうひとつの過負荷(マイナス)、悪転移動(ダポート)さ。」

「悪転移動(ダポート)…？」

「そう！自分の振りでも嫌ったものは全て別の場所に転移しちゃう。これを応用すれば好きな場所に自分や他の人を転移させれるんだ！」

「なるほどな。」

神田は頷くと辺りを見渡す。

「ここは…マテール？」

「うん、あ！いたいた！久しぶりー！」

過負荷(アレン)が手を振った人物は黒髪に童顔の学ランを来た少年だった。

「『やぁ』『観弥城君』『やっぱりどんな人に憑いても』『君の過負荷性(マイナス)は変わらないねぇ』」

「それ嫌味？」

「『違うよぉ』」

ニコニコと笑っての会話。
普通(ノーマル)ならこれは何ら問題ない風景だろう。
だが忘れてはいけない、彼らは『過負荷(マイナス)』だ。
神田は自分も同類(マイナス)なのに彼らの会話に悪寒を感じた。
「あ、こっちは神田君！僕のこっちの世界での初めての友達さ！」
「『そっか～！』『よろしくね、神田君♪』」
「あ、あぁ…」
神田は少し後退しながら差し出された手を握った。
「『で』『まだ戻らないの？』」
「う、うん…僕はまだ戻れない…。」
「『そっか～』『残念だけど仕方ないよね～』『まだ君は意識不明の重体』『それも大嘘憑(オールフィクション)きでもなかったことにできないんだもん』」
「本当は…」
「『ん？』」
「いいや、何でもないよ！」
神田はそのときの過負荷(アレン)の顔が悲しそうな顔だと思った。
が、すぐに儚い笑顔に戻ったためそれはわからなかった。

「あ、神田ちゃん。」

「な、何だ？」

「これから…ハジマルヨ。」

「な、何が…？」

神田は過負荷（アレン）の言ったことがわからず首を傾げた。

「わかんなーい。」

「おい！」

「でも…何かが始まるよ。これから、誰かが僕らの邪魔をする。そんな感じ…」

「俺達の邪魔…」

「すっごく厄介そう。しかも、僕らと正反対。」

「正反対…ってことは普通（ノーマル）か？いや、異常（アブノーマル）って可能性もあるな…」

「『気をつけて行動しなきゃね』」

球磨川がそう言う。

「じゃあ球磨川君。神田ちゃん。そろそろ行こっか？球磨川君はしばらく僕の部屋で過ごしてね。食事は僕が持ってくるから。」

「バレたらすべてが水の泡だからな。」

「『うん』」

そして彼らは悪転移動（ダポート）を使い過負荷（アレン）／アレンの部屋に戻ってきた。

第五夜　「やぁ、久しぶりだね球磨川君」（後書き）

次回――――巻き戻しの街かぁ、面白そうだね神田ちゃん♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3654z/

過負荷（アレン・ウォーカー）と神の使徒

2011年12月31日22時47分発行